
S I R E N × 名探偵コナン

アヤッチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SIREN x 名探偵コナン

【Nコード】

N04600

【作者名】

アヤツチ

【あらすじ】

それは、存在しない村。

誰も、知らない。

いや、知ってるものは、その村で死ぬ。

二度と出られない

死ぬことも、生きること許されない。

廃人達。

その村に立ち向かう

コナン達。

まだ、生存している、村人と協力し。
脱出せよ。

コナンは走る、仲間を救うために

雨と共に今日は

サイレンが鳴り響く

第一話・森にかこまれた、無残な死体（前書き）

はいはい

なんで、こんな発想したんでしょーかねー。

いやんなっちゃう。マジメにやれ。

あ・・・えっと。

R18ーGです。グロいです。

アヤツチこと、私は高木が好きです。

では、どござ。

第一話：森にかこまれた、無残な死体

殺人事件が発生したと、電話があった

毛利小五郎とコナン。

コナンを見張る為、毛利小五郎の娘、蘭も事件現場に来た

その死体は、大家が見つけた。

森奥のペンションで発見され

見事に八つ裂き状態で、無残だった・・・。

蘭は顔を真っ青にして、一回見て、もう見なくなつた。

コナンは毛利と一緒に普通に見ている。

蘭は不思議にコナンに質問した

蘭「コナン君は・・・怖くないの・・・？」

コナン「僕は、平気だよ？蘭ネーチャン。顔色悪いよ？」

そうはなしてるうちに。

コナンと蘭の間を通過して

高木刑事が突然、外へいつてしまった。

どうやら、高木刑事はこれほど無残な死体は見たことがなく、気分が悪くなつたようだ

高木「うつ・・・ん？目暮警部！」

外にいる高木が目暮警部を呼んだ

目暮「どうしたのかね？高木君。」

高木「血痕の痕跡のようなものが森に続いています」

目暮「それは、本当かね！？すぐに調べる。」

高木「ハッ！」

高木は敬礼をし、さっそく、調べにかかった

コナンは血痕をみている

ここは山奥で、森にほとんど囲まれていた

ここに辿りつくとしたら、細い道。車が一台しか通れない。トラックも無理だった

コナン「高木刑事。」

高木「え？」

血痕の採取の時、コナンが高木に質問した

コナン「この血液の痕跡の先は町とかあるの??」

高木「え、ないよ。ずっと森さ。」

(だよな……。森で殺害された可能性が高い。)

コナンはそう考えながら、森の中に入る

高木「……コナン君！？一人じゃ危ないよ!!」

高木はコナンを止める為に森の中に入った。

偶然、それを目撃した蘭。

蘭「……高木刑事……？あれ、コナン君は！？お父さん！」

毛利「あ？ガキなら外にいったぞ。」

蘭「まさか・・・!!」

(森に入ったんじゃない!)

蘭は危険だと感じ、追いかけて行った

しかし、その先は・・・。

第一話・森にかこまれた、無残な死体（後書き）

うっほ。

展開はやっ。

こんなんで、スイマセン。

第二話：サイレン・・・再び。（前書き）

サイレンが、再び・・・！！

よみがえる、恐怖。

そして、静かな、戦いが。

幕を開けようとしている！！

第二話：サイレン・・・再び。

森に入り込んだ。

コナン・蘭・高木刑事

しかし、何も無いはずの森に
村があった

そこに入り込んでしまった三人。

コナン「ここは・・・。」

コナンの目の前には
廃墟化としていた、村が視界に広がっている

コナン「村なんてないはずだ・・・。それに、結構広い。
村があったら、高木刑事も知っているはず。」

コナンはそう考えていた

一方、蘭は

蘭「コナンくん？コナンくん？どこいったのかしら・・・。
ていうか・・・。」

蘭は村に驚く

蘭「ここ・・・どこ・・・？」

蘭は周りを見る

しかし、それは不気味で、鳥肌がたち、すぐにも帰りたかった

ウーン……

ウーン……

サイレンが……鳴り響く

蘭「な……何……？頭が……。イタイ……。」

蘭が頭を抱え込む

コナンもそうだった

コナン「!？」

サイレンが鳴り終わると……

雨が降ってくる

切なく……不気味に……。

一方、高木刑事は……。

高木「なんだったんだ……さっきのサイレン……。」

警察「スイマセェン……。」

おかしい警官がゆっくりと高木に近づく

高木「あ……あの……大丈夫ですか!？」

その警官はどうみても大丈夫じゃない状態だった
血だらけで、まるで死人のようだった……。
しかし、その警官は
動いている。

高木「あ……あの……。」

警官「いつきますよ?」

高木「え……?」

警官は……

拳銃をとりだし、高木に銃を向ける

高木「え!? あ……あの!? え!? と……とにかく……。」

(逃げよう!!)

高木は必死に逃げ出した

警官は発砲し始めた

しかし……。

バァン! バァン!!

二発が高木の両足に当たる

高木「っ!!」

高木の足は崩れ、倒れ、しかし、それでも、逃げようとする

警官「ではア、さようならア」

高木「！」

(もう、駄目だ……。)

警官の銃口は高木の心臓に狙われ……

カチャ

もう、高木は死を覚悟した……。

バン……

銃声は赤き雨の音で消されていく……。

第三話：追われる二人（前書き）

高木刑事が死んでしまった・・・！？
廃人達がコナンと蘭に襲い掛かる！！
不気味な雨の中で
生き残れるのか！？

第三話：追われる二人

アツハツハツハツハ！！！！！！

女性の笑い声が聞こえる

蘭「何・・・？ここはどこなの・・・？」

ナース「誰か・・・いるの・・・？」

ナース姿の女性が近づいてくる

蘭は声が聞こえ、逃げたくなった

蘭「誰・・・？」

でも、ここはどこかも知らない

蘭はここはどこなのか尋ねることにした

蘭「あの・・・！すみません！！」

ナース「どうかあしましたかあ？？」

蘭「えっ・・・！？」

ナースは目から血を流し、心臓が撃ち抜かれていた

蘭「えっ・・・何・・・？なんで・・・？」

蘭は動揺する

何故、あの状態で動いているのか？

普通死んでいるはず

コナン「今、助ける!!」

コナンはシューズのパワーを上げ、近くにあった鉄パイプを蹴りだし
ナースの腹に命中!

ナースは倒れた

コナン「大丈夫・・・?」

蘭「新一・・・?」

コナン「何、いつてんの? 蘭ネーチャン!」

コナンは平気に子供らしく、しゃべるが
内心はヒヤヒヤしている

蘭「・・・だよね! 私ったら、これで、何回目かしら。」

コナン「・・・。」

(あつぶねー・・・。)

コナンは一息安心

だが

この村をぬけるまで本当の安心はできない

蘭「どうみても、危なそうね・・・。」

コナン「・・・ああ。早く、出ないと・・・。」

蘭「・・・。あれ・・・? 誰か倒れてる・・・。」

土の壁に誰か倒れている

蘭「え・・・これって・・・。」

高木・・・刑事・・・？

蘭「死んでるの・・・？」

コナン「待って・・・。」

コナンは脈を確かめようとしたが

後ろから・・・

ドゴオ！

コナン「！？」

蘭「コナン・・・君！？」

コナンの後ろから廃人が木刀で殴る

蘭「今、助けるからね！」

蘭は柔道の構えをし、廃人の顔面に蹴りを直撃させる

蘭「コナン君・・・！」

コナンを抱え走り出した

蘭「どこか・・・避難しないと・・・！！！」

蘭は赤い雨の中

コナンを抱え走り出した

第三話・追われる二人（後書き）

そろそろ、あの関西人登場させようかしら・・・。

第四話：少女と戻れない刑事（前書き）

高木刑事が最初、気が狂ってます。（おいw

佐藤×高木君のこと、完全無視します。

スイマセン。

てことは、女性の村人が・・・

おっと、こっから、わかるよ。

時間とストーリー的に関西のあの人はまだでません^^；
スイマセン。

（廃人の言い方を屍人に変えます）

第四話：少女と戻れない刑事

高木「……？」

(生きてる……?)

高木「何かが……飛んでる……？」

それは綺麗で幻想的な風景だった

優しい光を放った小鳥がたくさん飛んでいた

(綺麗……。)

高木はそれを眺めていた

近くに一人の女性がいた

高木「ねえ、あの光ってる小鳥は何？」

少女「誰？光ってる小鳥って何？」

少女はこっちを見ていない

高木「え？見えないのかい？」

少女「ええ。」

(……警官のようになれば、見せるのか……。)

高木はゆっくりと拳銃に手をのばし、少女に向けた

幻想的な世界を見せようとする習性が屍人にある。

少女「あの・・・え・・・？」

少女は振り向き、高木の行動に驚いた。

そして、高木は白い肌になっており、目から血がながれていた

・・・屍人？

少女は発砲される前に地面に自分から倒れこんだ

・・・。

しかし、発砲はされなかった

高木「!？」

(なんか変だ。気が狂った感じだ・・・。)

高木は少し正気を取り戻した

少女「・・・やあ!!！」

高木「!？」

少女は持っていた木のこん棒で高木の後頭部を何度も叩いた

のちに、高木は気絶した

少女「・・・この人。完全に屍人じゃないみたい・・・。とにかく、安全な場所へ・・・。」

少女は高木を抱え、去っていく

第四話・少女と戻れない刑事（後書き）

関西人・・・。お取り込み中・・・。
ごめんなさいねえ。出張かしら？

第五話：狂気の院長（前書き）

SIREN：NTを見本にしてるんで。

あの、NTの院長を……。

え？先生は死んだって？

……はい？なにいつてんの……？

バーローww

第五話：狂気の院長

高木の視界は真つ暗だ……。まぶたが重く、開くのが辛い
背中がひんやりする……。

少女「貴方、本当に正気！？もしかして、屍人じゃないの！？」

院長「うるさい。コイツは半屍人だ。実験ぐらい構わないさ。」

少女「何それ！？この人は大丈夫よ！！」

院長「もしかしたら、完全に屍人化するかもな。」

少女「そんなことない！この人はまだ正気があるのよ！？」

院長「……。」

少女「聞いているの！？」

カチャカチャと音がした

院長「さて……。」

少女「メスを持たないで！」

院長「……。」

少しずつ目が開き始めた

院長「……。この女の言うとおり正気があるか確かめよう。」

高木「八……？」

高木の顔色が悪いのは戻ってないが、血が消えている
心臓は撃ち抜かれていたが

院長「自分の名前を言ってみろ」

高木「……え……あの……高木です。。。」

院長「変な気を起こせば、アンタにはチャンスは与えないつもりだ。」

少女「……。」

高木「は……はぁ……?」

院長「俺の名前は、犀賀省吾だ。」

少女「私は……。」

犀賀「コイツには名前がない。」

高木「わかりました……。あの……。」

犀賀「聞きたいことがあるのは、わかる。だが……。」

ドンドンッ

誰かぁ、いるんだろぉ……?」

気味悪い声が病院に響く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0460o/>

SIREN×名探偵コナン

2010年10月19日09時05分発行